

### ロータリーの曙 日本編 1

日本にロータリー運動をもたらすきっかけを作ったのは福島喜三次 FUKUSHIMA Kisaji です。福島は一ツ橋大学を卒業後三井物産に入社して、1905年に渡米し、ニューヨーク、オクラホマ、ヒューストンを経て、1912年頃、ダラスの三井物産の現地法人サザン・プロダクツ社の支配人に就任しました。既に同社の社長ウィリアムスがダラス・クラブの会員になっていたため、福島は1915年ころ、アディショナル正会員として、ダラス・クラブに入会します。その後、ウィリアムスが、第一次世界大戦の勃発によってドイツに引き上げたので、正会員として1920年まで、同クラブに在籍した最初の日本人ロータリアンです。なお、福島の帰国後に、「島」某が彼に代わって入会したという記録が残っています。

喜三次の読み方については、「きそじ」「きさじ」の両説があり、RIが保存している東京クラブの創立会員名簿には、英語で KISOJO と記載されていますが、有田クラブの資料では奥様お話しとして、「きさじ」が正しい記載されています。私が現地でお伺いしたところ、有田ではさ行の発音がなまるために、「きっちゃん」と呼ばれていた模様です。

福島の生家は佐賀県西松浦郡有田町本町にある馬渡クリニックの敷地内に、向笠元 RI 会長の直筆で「福島喜三次生誕の地」書かれた石柱が現存しています。

一方、米山梅吉は1868年東京に生まれ、少年時代を三島で過ごしました。苦学をして渡米し、帰国後30歳で井上馨の紹介で三井銀行に入り、常務取締役にまで出世します。

そして、1918年10月に目賀田種太郎男爵を団長とする政府派遣財政経済委員の一員として渡米した際、1919年の正月をダラスの福島宅で過ごすこととなります。この訪米に際して、米山は、「メキシコの 境まで咲く 枯野花」「テキサスの 野の東や 初日の出」等の句を詠んでいます。現地駐在員として案内役を務めた福島から、ロータリーに関する話を聞いて、関心を寄せると共に、アメリカの幾つかのクラブを視察した模様です。

1920年1月に帰国した福島は、アルバート・アダムス国際ロータリークラブ連合会会長から、年度内に日本にロータリークラブを設立してもらいたいという委任を受けて奔走しますが、年度末までに、創立に必要なチャーター・メンバーの数を集めることができず、期限切れとなってしまいました。

エスタス・スネデコル連合会新会長は、福島に再度委任状を送ると共に、パシフィック郵船横浜支店長ジョンストンをクラブ拡大の世話役に任命して協力を命じました。

1920年9月1日に設立準備会が開かれ、同年10月20日、チャーターメンバー24名が集まって、銀行クラブで創立総会が開催され、東京クラブが誕生しました。なお、RIから

正式に認証されたのは 1921 年 4 月 1 日(登録番号 852)です。

この流れからは当然、福島が初代会長に就任すべきだと考えられますが、自分の親会社の上司でもある米山に功を譲ったものと思われ、さらにこれが後々、社会的地位とロータリーの平等性とに混乱をもたらす原因を作ることになります。

初代会長には米山梅吉、幹事には福島喜三次、理事に伊東米次郎、樺山愛輔、小野英次郎が就任し、合計 28 名で、東京ロータリークラブが創立されました。

創立当初の東京クラブは会員のほとんどが財界の大御所で占められており、選抜された大企業の社長や重役といった顔ぶれが並んでいます。この最初の人選が前例となつて、戦前の日本のロータリーは功成り名を遂げた財界人が入るクラブという錯覚を生み出すと共に、クラブ会員が当然自ら果たすべき仕事を事務局員に任せるといった悪い習慣を日本全国に広げる原因を作りだしました。

東京クラブの例会は当初は月一回であり、かつ、たびたび流会し、出席率も悪く、また規約に対する関心も薄かったと言われていました。

東京クラブ創立における、ジョンストンの果たした役割は極めて大きく、1921 年、彼の帰国に際して名誉会員に推薦してその功を讃えています。

福島は僅か二回例会に出席しただけで、1921 年 3 月に大阪へ転勤になります。それを機会に、関西財界人の間にロータリーに対する関心が高まり、英米訪問実業団の一員として渡米した星野行則がシカゴへ赴き、直接、RI 事務総長チェスレー・ペリーと会談して、大阪クラブ設立の意向を伝えました。

日本におけるロータリーの拡大に積極的だったチェスレーは、拡大に関する直接の指導を与えると共に、星野に大阪クラブ設立に関する全権を委嘱しました。帰国した星野は、福島と協力して拡大の作業を進め、1922 年 11 月 1 日に、第 1 回創立準備会を大阪ホテルで開催します。その際集った人は 10 人でしたが、いろいろと奔走の結果、11 月 17 日には、チャーターメンバー 25 名によって、大阪クラブの創立総会が行われます。初代会長は星野行則、副会長村田省蔵、幹事福島喜三次、会計八代則彦、理事平生釵三郎、片岡安、木村清です。

RI から、1923 年 2 月 10 日付けで加盟承認され、登録番号は 1349 です。

当初は、月 2 回の例会でしたが、1923 年 8 月からは、毎週例会に改め、管理運営面の充実、出席規定の遵守、例会の時間励行、クラブ歌の制定、親睦会、定款翻訳などが積極的に実行されました。

1923 年 9 月 1 日、午前 11 時 58 分、突如として起こった関東大震災によって、死者 9 万人、負傷者 10 万人、焼失 68 万戸、全壊 1 万 1 千戸という大災害となって、首都圏は壊滅的な被害を受けました。

RI の対応は迅速で、震災直後の 9 月 4 日には RI 会長ガイ・ガンディカーから、「RI および全ロータリークラブは深い同情の意を表す。如何なる事であろうと、遠慮なく申しつ

けられたし」の励ましの電報が届きます。

東京が壊滅的な状態であったため、大阪クラブが仲介の労をとり、福島幹事が「大阪ロータリークラブは、東京の三分の二と横浜のほとんど全域が崩壊した未曾有の災害に対して、日本国民に寄せられた暖かい同情に感謝すると共に、日本国全体がこの不幸に向かって立ち上がるために勇気と行動と決意をみなぎらせており、救援活動も徐々に進み、大阪ロータリークラブ会員も救援活動に然るべく役割を果たしていることを、国際ロータリーを通じて、アメリカ及び他の国にお伝え願うことを希望します」という電報を RI 本部に打電しています。

9月10日にはサンフランシスコ・クラブより1,000ドル、翌11日にはニューヨーク・クラブから1,000ドルの義捐金が到着し、16日にはRI本部より大阪クラブに「電報を拝受しました。RIが救援資金として25,000ドル寄贈することを東京のロータリアンにお伝えください。東京クラブがこの救援資金を受け取って、救援事業に使用するために、現地の銀行口座に振り込むのか、東京に送金するのか、それともどこかに送金するのか、もし東京クラブが受取ることが不可能なら、大阪クラブが代わりに受取ってもらえるのか、ご連絡ください」という書状が届きました。

この電報を受取った大阪クラブ幹事福島は、東京クラブの米山に次のような書状を出しています。「大震災に御無事の由、誠に嬉ばしく存じます。ニューヨーク及びサンフランシスコのロータリークラブより、1000ドル宛送金して来たこと及びその処分方法に就いては、星野氏よりお聞き及びのことと存じます。今日は又、シカゴの本部より次の通り2万5千ドル寄付の申込がありました。その電文をお知らせします。電文の意味は明瞭と存じます。私共は米国ロータリアン一同の深厚な同情に感極まって言葉が出ないのであります。どうか、会員其他に諮られ、なるべく速やかに、御返事を願います。此機会が縁となり御地のロータリークラブは勿論、日本に於けるすべてのロータリー・ムーブメントが大発展をする様希望して止みません。」

相談の結果、義捐金は東京クラブが受け取ることになり、その旨、シカゴ本部に連絡されました。その後世界中のロータリークラブから続々と義捐金が送られ、その合計は最終的に74,000ドルに達しました。クラブの内訳は、アメリカ375、イギリス60、カナダ40、キューバ6、メキシコ4、オーストラリア3、ニュージーランド、オランダ、フランス、パナマ各2、ペルー、南アフリカ、フィリピン、ブラジル、ノルウェー、デンマーク各1、合計16ヶ国、503クラブに及びました。

東京クラブは特別委員会を設けて、慎重にその用途を検討し、木下産院の建設、小学校の備品整備、ロータリー・ホーム建設、殉職警察官の遺族に対する援助活動を行っています。なお、義捐金の総額については、資料によって幾つかの異なった集計がでていますが、RIに提出された、1924年5月26日の最終報告書は次の通りです。なお当時の為替相場は¥100=US\$49です。

収入 RIより

74,216円30銭

	他の RC、その他	14,944 円 82 銭
	合計	89,161 円 12 銭
支出	木下産院	10,000 円 00 銭
	小学校	26,731 円 60 銭
	孤児院建設	37,000 円 00 銭
	殉職警察官遺族	15,429 円 52 銭
	合計	89,161 円 12 銭

孤児院は東京市の希望を取り入れて、東京クラブ会員清水釘吉の設計施工による 180 坪の鉄筋コンクリート二階建てで、一階には事務室、保母室、裁縫室、調理室、浴室、二階には居室 6 室、集会室を設け、さらにミシン 15 台を備えた、当時としては最新の施設で、Rotary Home と命名されました。1924 年 10 月 10 日に完成し、当日は、大勢の孤児や東京クラブ会員家族が参加して、開館式が催されました。

この建物は 10 年後に一部修復されましたが、RI 脱退後、東京市に管理が移されて、Rotary Home の名称も消え、その後戦災によって焼失しました。

なお、この震災によって全ての事務用品、書類、認証状、ロータリー旗を失った東京クラブに対して、シカゴ本部より一切の備品が送られてきました。

杉村広太郎の協力によって会報発行の準備が進んでいた矢先に大震災が起こって、一時中断していましたが、1925 年 5 月から、北島亘によって会報が発行されました。この会報は Tokyo Rotary Club Bulletin と名づけられた英文の会報で、外国のロータリアンから高い評価を受けています。